

# 椿 姫

La Traviata

作曲：ジョゼッペ ヴェルディ

作曲年：1853年

初演：1853年3月6日 ヴェネチア テアトロ・フェニーチェ

演奏時間：第一幕30分 第二幕60分 第三幕30分

原作：デウマ・フィス「椿姫」

## 主な登場人物

ヴィオレッタ (Violetta Valery：ソプラノ、"椿姫")

アルフレード・ジェルモン (Alfredo Germont：テノール)

ガストーネ子爵 (Gasotne：テノール)

ドゥフォール男爵 (Barone Duphol：バリトン)

時は19世紀の中頃か、パリとその郊外にて。

### 第1幕

社交界の上流を相手にする、洗練された高級娼婦・ヴィオレッタ (Violetta Valery：ソプラノ、"椿姫") の家の広間では、夜会の準備が整えられ、招待客が訪れます。ガストーネ子爵 (Gasotne：テノール) がヴィオレッタにプロヴァンス地方 (つまり田舎) 名家の子息・アルフレード・ジェルモン (Alfredo Germont：テノール) を紹介します。ヴィオレッタが病気の間毎日気遣っていたと聞き、不思議がるヴィオレッタ。彼女に気のあるドゥフォール男爵 (Barone Duphol：バリトン) はアルフレードを厭わしげに思います。

酒が行き渡り、皆はアルフレードに乾杯の辞を求めます。それに応えて「乾杯の歌」を歌うアルフレードとヴィオレッタら。

一同、別室へ向かいますが、ヴィオレッタは気分が悪くなり、皆に先に行くよう促します。後に残ったアルフレード、自分だけがあなたを本当に愛している、と。愛なんてと笑うヴィオレッタ。アルフレードは、一年前、あなたを見初めた時から恋しているとかき口説き、自分はそんな愛に値する女じゃない、とヴィオレッタは歌います。が...

暇を告げるアルフレード。花を渡し、枯れたらまた来て、とヴィオレッタ。翌日の再訪を約し、アルフレードは帰ります。他のお客も帰った後、ヴィオレッタは「不思議だわ！E strano!」と呟き、愛など諦めた筈の自分に突如甦った恋心を切々と歌います。が、直後、莫迦げたことだ、この東京砂漠いや違うパリに見捨てられた病身の自分に望めるのは、ただ享楽に身を委ねるだけよ！と歌い飛ばします。そこに遠くからかぶさるアルフレードの歌声。打ち消すように享楽こそ我が身上、と高らかにヴィオレッタが歌う内に幕。

### 第2幕第1場

約3ヶ月後、パリ郊外、ヴィオレッタの別邸。

直情径行単純??のアルフレード登場。二人の幸福な生活を歌います。そこに女中アンニーナ (Annina：メゾソプラノ) 登場。ヴィオレッタの言いつけで生活費のため家財を売りに行っていたと聞き、アルフレードは今すぐ買い戻しに行く！と言い残して立ち去ります。

ヴィオレッタ登場。夜会への招待状が届きますが、行く気なし。そこに訪れたのは、アルフレードの父・ジョルジョ・ジェルモン (Giorgio Germont：バリトン)。

いきなり「あなたに破滅させられようとしている若者の父だ」と自己紹介するジェルモン。毅然として、「女性の家で、その言い様。貴方の名誉のためにもお相手しかねます」と答えるヴィオレッタに、ジェルモンは意外な感に打たれます。

自分は財産目当てなどではない、真実の愛に目覚めたのだとして、自分の財産を全て売ってしまうこと

を明かすヴィオレッタ。ジェルモンは心打たれながらも、自分の娘の縁談が息子の不行跡故破談しそうなのだと、別れるように頼みます。それも、永久に。

ヴィオレッタは、自分は病気なのだ、アルフレードと共にあることしかもう希望はないのだ、と激しく訴えますが、ジェルモンはあくまでお決まりのセリフ、神に認められた関係ではないし、男は移り気なもの、歳をとれば...と攻めます。遂に泣く泣く別れて犠牲となることを決心するヴィオレッタ。気高い心だ、とジェルモン。ヴィオレッタは「私死んでしまう！」と、自分はきっと死んでしまうだろうが、自分の心だけは彼のためにあったことをいつか伝えて下さい、とジェルモンに頼みます。言葉としては理解したジェルモン、暇を告げます。

ヴィオレッタは泣く泣く別れの手紙を書きます。恐らくは他の男の元へ行くと。

アルフレード登場、父が来ているようだがと話します。ヴィオレッタは私は庭にいるから、きっと許して下さいと語り、「私を愛して、アルフレード！私が貴方を愛しているほどに！...さようなら！Amami, Alfredo, quanto io t'amo...Addio!」と歌って立ち去ります。後に残るアルフレードに、ヴィオレッタからのあの手紙。ショックを受けるアルフレード。父ジェルモン登場。「プロヴァンスの海と陸をお前は忘れてしまったのか？」と、家に帰るよう諄々と説きますが、怒りに燃えるアルフレードはあの夜会への招待状を見つけ、さてはこれか！と出て行きます。

## 第2幕第2場

パリの夜会。ジプシーに扮した女達の占いごっこやら、闘牛士の恋の顛末を余興でやっています。賭博が開かれているところへアルフレード登場。賭博に加わります。相前後してドゥフォール男爵に伴われヴィオレッタ登場。アルフレードが勝ちついでに挑発的な当てつけをヴィオレッタへ投げるので、男爵怒って勝負を挑みますが、口ほどにもなく負け続けます。食事の用意が出来、一時休戦。

ヴィオレッタは一人抜けだし、アルフレードを呼び出します。帰って、貴方の身が心配だからとヴィオレッタ。帰るなら君と一緒にだ、とアルフレード。それは出来ない、とヴィオレッタ、成り行きで"男爵を愛している"と言い、アルフレードは客全員を呼び、自分はこの女に世話になっていたが今こそ支払いを済ませる、と言わざる賭博の勝ち金を叩き付け、ヴィオレッタを侮辱します。倒れるヴィオレッタ。

追い掛けてきた父も含め皆の非難を受け、後悔するアルフレード。責める合唱。怒る男爵。その中で、あなたは私の愛を分かっている、でもいつの日か分かって下さるでしょう、と、あくまでアルフレードへの愛を歌うヴィオレッタなのでした。

## 第3幕

パリ。ヴィオレッタの寝室。病魔に弱り切ったヴィオレッタの元へ医師グランヴィル(Dottore Grenvil :バス)が訪れます。いずれよくなりますよ、と医師。お医者様には嘘をつくのが許されていますのね、とヴィオレッタ。帰り際、容態を訪ねるアンニーナに、肺病だ、もう長くはないでしょうと告げるのでした。

街は謝肉祭で賑わっています。ヴィオレッタはアンニーナに貧しい人に施しを、自分にはもう大して必要ないのだから、と話し、手紙が来ていないかと行かせます。

一人になったヴィオレッタは、ジェルモンからの手紙を取り出して読みます。アルフレードと男爵は決闘し、男爵が負傷しただけ。アルフレードは外国にいるが、全て話したのでいずれ貴方の元へ向かうだろう。自分も参ります、と。

「遅すぎるわ！待っても待っても誰も来ない！」とヴィオレッタ、病に冒され、望みは何もない、神様、道に迷った女をどうか受け入れて下さい、と歌います。

そこにアンニーナが駆け込んできます。アルフレードが来た、と。感極まって抱擁するアルフレードとヴィオレッタ。二人でパリを離れて暮らそう、もう誰も引き離せないと歌う二人。しかし、ヴィオレッタにはもう服を着替える力もなかったのでした。アルフレードがやって来ても自分は死んでしまう、やはり希望など何もないのだわ、と神に訴えるヴィオレッタ。希望を失ってはいけない、と虚しい言葉を語るアルフレード。父ジェルモンも登場しますがもはや為す術無し。

ヴィオレッタはアルフレードに自分を忘れないで、でも、もしあなたにいい人が現れたら結婚して下さい、私は天で祈っています、と語ります。直後、「不思議だわ！苦しくなくなって力が満ちてくる！私、生きられるのね！嬉しい！」と喜び、立ち上がり一亡くなります。幕。